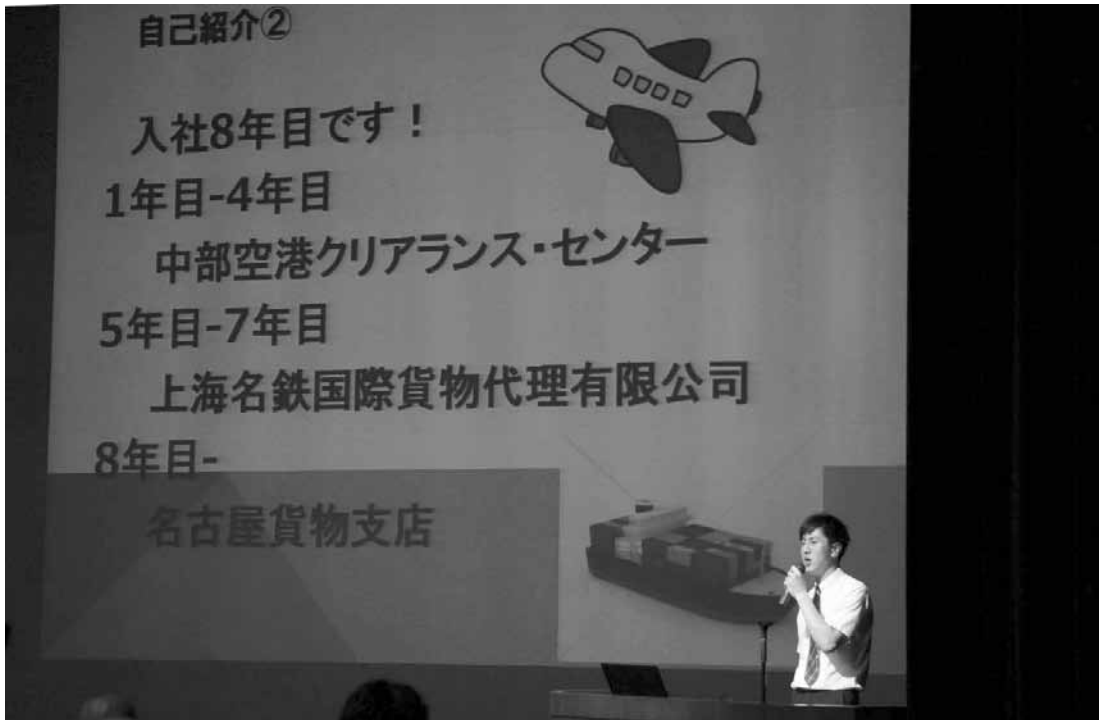


【講演記録】

いま、上海ではたらく —愛大で学んだこと—

名鉄観光サービス株式会社 愛知大学現代中国学部卒業生 **野口 晃太郎**
(2018年7月1日、岡崎市図書館交流プラザ Libra ホール)



皆さま、本日はお忙しい中、お時間を割き、この場に足を運んでいただきありがとうございます。

今、この会場を見渡してみると、人生の大先輩の方々ばかりです。若輩者の私が皆さまに伝えられることをお話しできたらと思っております。では、よろしくお願いたします。

今日は、上海で仕事をした中で感じことや、そこに生かされた愛知大学で学んだことについてお話しさせていただきます。

まずは、私が一体どういう人間なのかということを知っていただきたいと思います。1986年生まれ、昭和でいえば61年、とら年です。愛知県の津島市が出身地で、今は名古屋

市に住んでいます。趣味というか、特技というか、そういうものが2つあります。それは今日の話にも大きく関係するのですが、一つは中国語です。20歳の時に出会い、それから10年余り勉強しています。今もNHKのラジオなどを聞いて中国語の力を落とさないように頑張っています。もう一つは剣道です。剣道は、中学校からやっているので大体20年になります。現在は、勤め先のグループに入って週に1回、水曜日に枇杷島にあるスポーツセンターで2時間ほど稽古して汗を流しています。

余談になりますが、この中国語と剣道というのが、私の中ではいい具合に合っているのです。剣道はオリンピック種目ではな

いのですが、3年に1回、世界大会が開かれています。ちょうど今年は開催年でして、韓国で大会があります。ここ10年で中国の剣道のレベルというのは急速に上がってきました。私は学生時代に北京に1年ほど留学したのですが、当時の中国の剣道のレベルはそれほどでもなくて、私でも教えることができました。そこで、中国語を教えてもらう代わりに、私が剣道を教えるということをやっていました。ルームメイトは中国の方でしたし、私の中国留学は剣道と一緒にあったというもので、そのことは個人的にとっても良かったと思っています。

今、私は結婚して生後6カ月の赤ちゃんがいますので、剣道、中国語、仕事、子育てに日々奮闘しているところです。

さて、本題に入っていきます。私は名鉄観光サービス株式会社というところに勤務しているのですが、「名鉄観光」と聞くと多くの方は「旅行」のイメージしか浮かばないのではないのでしょうか。名鉄観光サービスと知っているくらいですから、「旅行」の会社であることはたしかなのですが、実は「旅行」とは別に「貨物」を扱う部門もあり、私はそこにいます。ですから、名鉄観光サービスの社員といっても、私は旅行業のことはまったく分かりません。では、何をしているのかというと、貿易です。輸入とか輸出とか、そういう業務です。

例えば、外国から貨物が来ました。それを国内に流通させるためには税関を通さないとはいけません。その手続きを通関といいます。名鉄観光サービスという会社は通関代理店でもあって、そういった手続きもしているのです。ほかに輸送があります。海外から日本に来た荷物を、また海外へ送るのです。海上の輸送であったり、航空での輸送であったり、そういう貿易関係の業務全般を請け負っております。

私は入社してから4年間、中部国際空港

セントレアで働いていました。セントレアは航空貨物の輸入業務の現場です。そこで税関の手続きをしていたのですが、具体的に何をやるのかといいますと、貨物がセントレアに届くと、その貨物について詳細に書かれた書類を税関に提出して検査を受けるのです。場合によっては、税関から貨物の開封を求められます。そうしてチェックを受けて書類と貨物が一致していれば輸入ができるわけです。けれども、海外から来る貨物というのは、開けてみると書類と違うものが入っていたりすることもあるのです。そうすると、申告外物品となります。申告した内容と違うではないかということで、税関のおとがめを受けますし、輸入者に確認して申告し直さないといけなくなります。

その後、今日のメインのテーマですが、2年間、上海に駐在しました。そこでは貿易業務の現場から離れて日本と中国との間をつなぐオペレーター業務をしていました。日本から来る問い合わせを、中国語にして中国側に投げるのです。もちろん、中国側から問い合わせがあったら、日本語にして日本へ投げます。日本と中国は、考え方が違い、ただ翻訳するだけでは伝わらないことがよくあるので、それぞれの考え方をきちんと理解した上で進めないといけません。そうしたバランスを保ちながら中国に駐在する日本人としてオペレーターを2年間務め、2016年6月に帰国しました。

帰ってきてからは、名古屋伏見の弊社のオフィスの所属になり、今は営業をしています。

上海で働くというテーマの前に私が愛知大学で学んだことについてまとめておきたいと思います。

愛知大学では、まず、「中国という国は何ぞや」ということを学びました。

正直いいまして、私は高校生の頃、中国に対する興味や関心はまるでありませんでした。

た。中国とは何かと尋ねられても、パンダかラーメンぐらいしか浮かびませんでした。それに、私にとって愛知大学は第一志望の学校ではなかったのです。そんな状態で始まった学生生活ですが、1年生の時にいろいろな講義を受ける中で面白いと思うようになり、そこからどんどん中国にはまってきました。中国の文化だったり、文学だったり、歴史、法律、経済、それに太極拳までやるという最高の環境の中で第一志望でなかったからといってふてくされている場合ではないとも思いました。中国について学んでみたら、中国というのはとても面白い。愛知大学に入ってよかったと結果的に思うようになりました。

特に印象が強かったのが、高橋五郎先生の中国農業経済論の講義でした。中国に興味はなくても、中国は経済発展しているとか、ものすごい金持ちもいれば、ひどく貧しい人もいるということはニュースや新聞でなんとなく見知っていました。高橋先生の講義は、そうした貧富の差について、金持ちの都市の人々と貧困に喘ぐ内陸部の人々との間の大きな差はどうしてあるのだろうかということをもとくものでした。中国では、生まれた瞬間に戸籍によって格差が生じるということを、この講義で知りました。都市で生まれた人は都市の戸籍、農村で生まれた人は農村の戸籍になるのですが、農村の戸籍の人が都市に出てきて、都市の戸籍の人と同じ仕事をして、給料は都市の戸籍の人の方が高いのだそうです。それでも、農村で働くよりは都市の方がお金をもらえるので仕方なく働きに出てくる。ですから、農村の戸籍の人がどれほど頑張っても、都市の戸籍の人には勝てないという現実があるのです。さらに、農村の中でも格差があり、それは中国の第2の経済格差であるというようなことを勉強していくと、自然と中国に対する興味がどんどん湧いてき

ました。こういう中国についての知識というのが愛大で学んだことの一つです。

二つ目は、中国語です。これは上海駐在で大いに役に立ちました。愛大のカリキュラムというのは、2年生の時に中国で行われる現地プログラムというのがあり、有名な周恩来首相ゆかりの学校である天津の南開大学に留学することになっています。これは全員参加です。このことを私は入学してから知ったのですが、日本の大学に入ったのに中国に行かないと単位が取れないことにとっても驚かされました。決して嫌々というわけではなく、初めての海外旅行が天津南開大学での長期滞在型になったくらいの感覚で行きました。ぜひやりたいというわけではなかったのですが、講義は中国語ですし、周りも中国人しかいませんから、中国語をやらざるを得ない状況でした。ここは中国だし、中国をやるしかない。そのような4カ月で少しは中国語が話せるようになりました。「你好!」とか「谢谢」は当たり前ですが、例えば「これください」なら「我要这个」というのですが、そういった生活で使う表現が自然と出てくるようになったのです。これで旅行ぐらいなら大丈夫と思いながら帰国しました。

それから、3年生の時に現地調査に参加しました。これは現地プログラムのような全員参加ではなく、希望者だけで行うのですが、私はなぜか手を挙げてしまい浙江省の杭州に行って3週間のフィールドワークをしました。先ほどお話したように、農村の格差について興味を抱いていたので、農村班に参加して聞き込みをしたり、アンケートをとったりして生の声を聞いて、その成果を報告しました。これについて7,000字くらいの文章を書き、それが製本されて愛大の図書館に入っているのも、よろしければ読んでみてください。

4年生になった時、周りが就職活動をする

中で私は何を血迷ったのか交換留学に行きました。交換留学なら費用が必要ないからと親を説得し、選考試験を通過して北京語言大学というところに1年間留学しました。1年生の時は4カ月、3年生の時は3週間、そして1年間留学して自分の中でもだんだん中国語に自信がついてくると、愛大に入ってよかったと心から思うようになりました。私は、英語はまったくできませんが、愛知大学で学んだ中国語だけでやってきています。

愛知大学で学んだことの三つ目として、教員免許を取得したことがあります。高等学校の社会科と中学校の社会科です。愛知大学という学校は、専門以外のさまざまな科目を学ぶことができます。私は現代中国学部でしたが、社会科の教員免許も取って楽しい大学生活を送ることができました。

もっとも5年かかってしまったことは、親に申し訳ないと思っています。

私は愛大で学んだ三つのことをベースにして名鉄観光サービスに入り、上海で働いてきたのです。

仕事で行った中国というのは、留学の時とはまったく別の世界でした。

まず、日本人だからといって容赦してくれるようなことはありませんでした。中国語や英語で、電話やメールの連絡が入ります。私が日本人だからといって、中国語や英語をゆっくり話してくれることはないですし、日本語ができる中国人だからといって日本語を使ってくれるわけでもありません。ネイティブのスピードに戸惑い、理解できないままで半年が過ぎました。その時は、後ほどメールで送ってくださいと中国語でお願いし、必死になって辞書を引ながらメールの文章を解説していました。

中国人との仕事の付き合いで感じたことに、彼らは仕事に対してとても真面目です

けど残業はしないということがあります。これはとても印象的でした。

日本人は、よくいえば責任感が強い。どれだけ夜遅くなろうが何とか仕事をやり終えようとする。損得とは関係のないまるでボランティアのような精神が仕事に対してあると思います。

ところが、中国人というのは、例えば定時が6時だとすれば、5時59分までは真剣に仕事をするのですが、6時になった瞬間に帰ってしまうのです。その辺りの時間の感覚が日本と中国とは違う。私の印象では、彼らは仕事をダラダラするということがありません。そこは格好よいと思いました。6時までは決して手を抜かずにやります。「ノー残業デイ」だとか、「働き方改革」だとか、そんなことは中国ではすでに達成されていました。

もう一つ、中国の人というのは、利益に対して非常に敏感です。留学の時はお金の話はなかったのですが、仕事となると当然ですがお金が関わってきます。お金の話になるとシビアで、時にはバトルが始まります。そういう時はかなり強い感じで迫ってきますから、こちらは耐えしのぐような感じになりました。そういうところは、とても大変でした。

後は、話が180度変わってしまうことが中国にはよくあると感じました。例えば、ある日、中国側が、

「Aです」

といってきたので、私は日本にそのまま伝えました。すると、次の日に中国側は、

「Bでした」

といってきたのです。私が日本に「中国側はBでしたといっている」と伝えたと、当然、日本の方は混乱しました。

「昨日はAといっていたではないか。いまさらBといわれても、こちらはAとしてすでに動いている」

中国側に理由を問いただすと、こういつてきました。

「Bに変わったからからだ」

この一言だけで終わりです。初めてこのようになった時は衝撃を受けましたし、こうしたことで何回も日本の方からお叱りを受けました。けれども、中国の人は別にうそをついているわけではありません。本当に状況が変化したので、AからBにただけなのです。それを、何も考えずに「AだからA」、「BだからB」、とそのまま伝えている私が悪かったのです。中国の人は、あいまいな方はせずに断定的なのが基本姿勢ですから、「Aです」としかいわないわけです。だったら、間に立つ私が断言口調を止めて、「もしかして変わるかもしれないんですけど、今のところはAです」

と日本に伝えれば問題にならずに済むのかもしれないのです。

上海に駐在している中に、そういうことをするのが、私が存在している意味なのではないかと考えるようになりました。日本人の感覚と中国人の感覚を考慮して、両者の間をつなぐのです。「AだからA」というのではなくて、「Aかもしれないし、Bかもしれない」、さらには「Cが出てくるかもしれない」と私自身がきちんと考えながら伝えるということがポイントなのではないかと思って働くようにしました。

先ほどもいいましたが、中国の人はお金に対してはとてもシビアです。日本人のボランティア精神のようなものを求めてはだめだと思っていました。それに、日本人は中国人の頑張りというか、強気な様というか、そういう姿勢に一步引いてしまいがちです。私たちの方も、もっと強く主張していけばいいのかなと感じながら仕事をしていました。やはり、「郷に入れば郷に従え」です。頭では分かっていたのですが、現地に入ってみると、それがすべてなのだとあらためて

思いました。中国に駐在するなら、まずは現地の方々とよい関係を築かなければ何も始まりません。中国人を批判的に捉える人もいると思いますが、実際の彼らは真面目です。むやみやたらに間違っただけをいうわけはありません。それを断片的に切り取って批判するのは勝手なのですけど、仕事をする上では、そのように見えることもシェアしないと進まないのではないかと思います。同じアジアといっても考え方はまったく違います。中国の人には彼らなりの考え方があります。それを私たちが受け入れてこそ初めてビジネスができるのではないのでしょうか。駐在員というのは、そこをうまくやるのが大事な仕事であり、そしてそれがすべてなのだともいえます。

このような上海駐在の2年間はあっという間に過ぎてしまいました。今思い返すと、仕事も、中国語も、それから剣道も、飲み会も、もっと積極的にできたのではないかと考えています。食欲すぎるぐらいやって、ようやく中国の人たちの強い姿勢に追いつけるのです。上海で見たビジネスで成功している人は、やりたいように、どんどん積極的に行動していました。

私は上海でも剣道を続けていました。現地の剣道愛好会に入って、稽古が終わった後には「第二道場」と呼ぶ飲み会があるのですが、そこで出会える日本の方々というのは、私のような平社員もいれば、学生もいるし、管理職やかなり上の世代の方もいらっしゃいました。そこでは、日本国内では絶対に会うことができないようなクラスの方々とは直接交流することができ、自分の視野がとても広がりました。お酒の席というのは、ただビールを飲むだけではなくて、そういった勉強にもなるものなのです。だから、これからは何事も積極的に取り組んでいこうと思っています。

最後に、これからの中国に関わるビジネ

スについてお話ししておきたいことがあります。

中国はもはや先進国といっても過言ではないと個人的には思っています。昔は世界の工場でした。それは、中国で物を作って、それを海外へ輸出するという時代でした。しかし、現在は、そうした工場の時代から変化してきています。

私が携わっている貿易では、日本に物を輸入するには消費税のほかに関税というものが課せられるのですが、発展途上国から日本に輸入する際には、その国を発展させるために関税が限りなくゼロになるということになっています。そうすると、その発展途上国から日本への輸出がどんどん増えていくのです。反対に、先進国から日本に物を入れる時には、関税を上げて日本国内の産業を守ろうとしています。中国は、一昔前までは関税がほとんど課せられなかった国でした。しかし、最近は中国から来る貨物に対して関税がどんどん高くなってきていて、もう先進国と同じ扱いになってきました。

そのような状況で、中国はこれからどのようなようになっていくのかということが問題になっているのですが、内陸部にビジネスマーケットがたくさんあるので、中国の国内で物を作って、そのまま中国西部の内陸で販売していこうという傾向があるようです。そうはいっても、中国の製造業なしでは世界は成り立っていかないので、しばらくは中国で物を作るという時代が続くと思います。

長期的には、今後は中国だけではなく、東南アジア、ASEAN の方も視野に入れていく時代ではないかと思っています。最近のユニクロのタグを見ると「made in China」だけではありません。「made in Bangladesh」、「made in Vietnam」、「made in Myanmar」が増えているはずですが。そうした国々から日本に物を入れる時の関税はゼロに近いですから、中国から入れるよりも安価になるのです。そう

いったことで、多くの製造業の工場は南下する傾向にあります。ただ、そうした国々はまだインフラが整備されていないので、中国での製造を行いつつ、東南アジアでも事業を立ち上げているような状態です。

私はセントレアの現場、上海でのオペレーター、名古屋での営業をしてきましたが、まだ入社 8 年目の若造です。今、そんな私にしかできない仕事があると思っています。職場の先輩で中国に 2 年間駐在していた方はいないですから、そうした経験があるからこそできる仕事があるに違いないと思って、日々の業務に取り組んでいます。

今日のご静聴ありがとうございました。

質疑応答

質問: 日本人のあなたが中国に駐在されて、郷に入っては郷に従えと感じたとのことですが、反対の立場で、中国人が日本に駐在した時、彼らは郷に入って郷に従えとなるのでしょうか。

野口: 私の感覚では、従っていない方が多いと思います。例えば、ゴミについてです。中国では、道を歩いていても、ゴミをその辺に捨てるような光景を目にすることがあります。彼らは、それを、日本に来ててもやってしまうのです。

ビジネスでも、こちらに合わせることはありません。それは郷に従う、従わない以前の問題です。中国の人は利益をどこまでも追求しますから、そうするのが仕事のやり方なのです。

質問: 愛知大学の卒業生です。あなたのような優秀な後輩が育っていてうれしいです。

何十年も前になりますが、私は中国と貿易をしたことがあります。日本の工場が難しいと断ってくるような発注をしても、中国の工場は受けてくれました。しかし、納期

間際になって発注通りには作ることができないと一方的に変更してきたり、届いてみると色が違っていたりといろいろありました。途中で相談なり、いい訳なり、確認なりがあればよいのですが、それが少なかったです。今はどうなのでしょう。変わりましたか。

野口: 変わっていません。例えば、生産ロット数が 1,000 個だったものが、突如、2,000 個になっているということがあります。めちゃくちゃなことだと思うのですが、そういうことが実際にあります。運ぶ時にも、貨物を船で動かすか、飛行機で動かすか、そういうことでもトラブルが起きます。そういうところは私たちの仕事の中で一番苦勞するところなのですが、日本側から現地側に何回も連絡を取って、限りなく問題がない状態にしていくしかありません。